

A. フランスの聖者・隠者・修道士

加 藤 林太郎

1

A. フランスの作品の登場人物には宗教家、聖職者が多いと言われる。「彼の創造した印象的な人物像の中には、『タイス』のパフニウス、『人間悲劇』のジョヴァンニ、『散歩道の楡』（『現代史』第一巻）のランテーニュ師のような僧侶が多い。そのなかでも、もっとも生命力にみちた忘れがたい存在は、『タイス』の次に書かれた『焼鳥屋レーヌ・ペドーク亭』の主人公、博識で陽気な好漢ジェローム・コワニャール師であろう。」⁽¹⁾と評される所以である。しかし、それらの人物は『コリントの結婚』（1876）に始まり『天使の反逆』（1914）に至るこの作者の宗教的主題の一部をなすものであろう。その中に現れる聖者、隠者、修道士が人物型として A. フランスの作品の中で無視できない存在であることを以下に考察したいと思う。

子供時代の思い出を語った『我が友の書』（1885）の中で幼いピエール（A. フランスのこと）が聖者になろうとした事件が語られている。《メイドにはなをかんでもらう時泣き出す年頃にすぎないのに、ピエールは名誉にあこがれ切っている。軍人としての名誉は、鉛の兵隊を動かすだけでは望むべくもない。彼は聖人になろうと目論む。余り準備を要せず多くの称賛をもたらすからである。母さんに読んでもらう使徒伝で、使徒たちの聖なる行為については知っているが、殉教も伝道も手段として不適である。容易、確実な方法として苦行によることとする。まず断食を実行するため昼食をことわり、病気かと心配される。柱の上で暮らした聖者の例を実行するため台所の水道の上に登ってメイド

に立ち退かされる。貧民に富を分配した聖者にならって、父さんの室の窓から貰ったばかりの光った銀貨とこまを投げると父さんは「この子は馬鹿だ」と叫びながらあわてて窓をしめる。散歩に行く時は、かぶらされた帽子から羽根を引き抜く。苦行帯を作るため椅子に詰まった毛を抜いてメードに尻をぶたれる。名刺の上に「隠者にして暦の聖人」と書きたいのだが、家庭の中で聖性を実行することの不可能をさとする。⁽²⁾》自他ともに認める懷疑家、反宗教家が無邪気にも聖者を志願したという逆説が微笑ませるけれども、その宗教批判家の筆の下から数多い聖者が生み出されたことは不思議だと言わねばならない。

師ルナンの生地への敬意もあって、作者はブルターニュに伝わる聖者伝をたいへん好んだ。もう一つの思い出物語『ピエール・ノジエール』(1899)のほぼ半分を占める「ピエール・ノジエールの国内旅行」に聖者の伝説は数多いが、この作品を最後に締めくくっているのはブルターニュの風物と伝説である⁽³⁾。ガリア辺境の伝道者達の言い伝えに作者は古拙の味わいを見出したらしい。《ブルターニュは謎の巨石建造物ドルメンやメンヒルの土地であるが、農民によればドルメンはこびと達の住居であり、またカルナックの巨石列は聖コルネリの手によって石に変えられた異教徒の巨人である。ある日聖コルネリは荒野で異教徒の巨人の軍勢に追いかけられた。神の僕は舟に乗って沖へ出ることで大危難を逃れようと岸边まで走ったが舟が見当たらずと見ると、聖者は不信心者共の方を振り返り、両手を差しのべたと思うとたちまち彼等を石に化してしまった。今日なお人々はこの巨石列を「聖コルネリの兵士」と呼んでいるのである。》

これらの辺境の伝道者の中から見出された聖マエールの伝道は、逆説フランス史『ペンギンの島』(1908)の第1章となり⁽⁴⁾、当時唱えられつつあった愛国的フランス史を愚弄する役割をになっている。《聖者マエールはブルターニュ沿岸の異教徒の教化に努めていたが、ある日入江に浮かぶ石の桶を見つけ、これに乗って更に島へ渡ろうとする。弟子に化けた悪魔が近づき、石桶に帆をとりつける。石桶は悪魔の送る風を受けて猛烈な速度で聖者を北氷洋へと運ぶが、雪と氷の反射で視力を半ば失ったマエールは氷島に群れるペンギンを住民

ととりちがえ洗礼をほどこす。異常事態に困惑した天国では天使や聖者が召集され、洗礼の有効か無効かを論じる会議が開かれる。形式を尊重して「有効」とすれば礼拝の義務のある鳥類ができ上がるが、ペンギンには魂がないため善悪の判断には関係がなく、地獄へも落ちないことになる。神はペンギンをして人間に変えてやることで困難を克服される。この新人類の住むペンギンの島をマエール聖者が石桶に引かせて戻ったのがブルターニュの岸であった。これがペンギン人すなわちフランス人の滑稽な起源である。ここからフランスの歴史の残酷なパロディが展開する。》執筆当時、作者はドレフェウス事件の後遺症の中にあつて、愛国的フランス史にも教会にもことのほか反感をおぼえていたから、勇敢な伝道者を笑うべき失敗者にしたけれども、ベダ尊者が半盲となつてなお荒野の石に向かって福音を述べ伝えた故事によっている。神は尊者を悲しませてはならぬと思われたため、石たちは人声を発して「アーメン」と唱えたと言う⁽⁵⁾。

ブルターニュの伝道者たちに作者は好意を示すけれども、山野の異教神退治を偏狭な行為とみなしていることが分かる。しかし作者は山野の異教神たちが神の威光によってことごとく姿を消したとは考えなかった。そうした古い神々の生き残りのドラマを語ったのが『アミクスとセレスタン』（『螺鈿の手箱』1892）である⁽⁶⁾。《復活祭が近づくと、冬の間は静かであった森にも泉にも、聖水と聖ヨハネの福音書で追い払われたはずの妖精達が帰って来る。木々の茂みは小さな彼女たちの姿で一杯になる。無数に住まう異教の神々を追い払おうとする隠者の努力もなかなか報いられない。と隠者セレスタンは森の小径で羊の足をもった牧羊神の一人に出会すが、この若い牧羊神は十字を切ろうとする隠者をとどめて復活祭をともに祝いたいと申し出る。このアミクスと名乗る田野の神は、隠者は年をとった牧羊神であると見て彼に親しみを示し、祭壇をさんざしの花飾りでかざる。しかし隠者がミサの供物を奉っている間、山羊の脚をした男は、角の生えた額を大地にすり寄せて太陽を礼拝する。この日からセレスタンとアミクスは生活を共にしたが、隠者はどうしても主の秘蹟をこの半獣神に理解させることはできなかった。だが真の神の礼拝堂は常に山や森や

水辺の花をもつてにぎやかに飾られるのであった。二人は田野の住人達の無知からともに聖者としてまつられるに至る。》

『聖サティール』（『聖女クララの泉』1895）もパルナス派亜流の小説である⁽⁷⁾。《ここには貧しいフランシスコ教団の修道士の誘惑が物語られており、彼のために異教徒の墓からサチールやニンフの亡霊の群れがあらわれ、ニンフは彼の悪夢の中で歯の抜けた醜怪な老婆に変わる。何日間かこの幻覚に悩まされた修道士は、遂に聖サチールの亡霊と出会うが、この聖サチールなるものは、初期のキリスト教徒と生活を共にし、これを助け、これに仕えたサチールで、その死後に建てられた墓は、幾千万の異教の森の精や、もみがらの様に小さく軽くなった忘れられた神々の聖殿となっていたのである。》伝道者や修道士は勝者たる新宗教の代表として、新しい信仰と古い信仰のひそやかな合致あるいは神々の永遠の消滅に立会っているのである。

聖者に求められた能力の最大のものは奇蹟を行うことであつたろう。サンタ・クロースとして有名な聖ニコラの奇蹟を語ったのが『大聖ニコラの奇蹟』（『青ひげの七人の妻』1909）である⁽⁸⁾。《『黄金伝説』にはないが、聖ニコラの奇蹟として塩漬だるの中の三人の童子をよみがえらせたことは歌にもある。その奇蹟の後日談である。旅の途中聖ニコラはある夜野中の一軒の宿屋に泊まった。天使のお告げで、宿屋の塩漬だるの中に7年前に殺されて閉じ込められている三人の童子がいることを教えられる。聖人が奇蹟の力で子供たちをよみがえらせると、宿屋の亭主は驚きかつ恐れて逃げ去ってしまう。三人の孤児は落穂拾いをしていてこの残酷な男の手にかかったのだった。三人の童子は聖人のもとで育てられることになったが、寛大な聖人が辛抱して罰しないのが仇となって悪童となり、やがてよからぬ青年となる。その一人マクシムは不良仲間の首領となって隣村の娘たちを掠奪するという暴挙を敢行するが、その後王の軍隊の最強の武将となる。シュルピスは妄想家となって奇説を唱え教会に不和の種をまく。ロバンは金貸しとなって聖人の慈善事業に資金を提供するがさらに王室附財務官に任命される。ところで聖人は美しくしとやかな姪のミランド姫を目の中に入れても痛くない程に愛しておられたが、三人の悪青年はそれ

ぞれこの姫を食いものにする。金貸しのロバンは用立てた金の返済を迫り、姫を無一物にする。さらにロバンは聖人からも取り立てを行い教会の聖器室を空にする。一方大合戦に勝って帰った騎士マクシムは混乱に乗じて姫を手ごめにする。シュルピスは過激な新宗教エデン教を唱え、裸になって四つ這いで歩く宗派を町にひろめる。ついには姫もこの新宗教のとりことなって全裸で四つ這いとなり、唸りながら聖人の前に現れる。異端追求の手がミランド姫にも及ぶが、聖人は愛する姫をかくまって引き渡しをこぼんだため破門となる。聖人は隠者となるため高い山に登っていったところ、一軒の小屋に牝鹿相手に平和に暮らす老人に出会う。すると老人は聖人の前に平伏して感謝する。この老人こそ20年前、聖人の奇蹟に驚いて逃げ去った宿屋の主人であった。行いを悔み神様から平和をいただいたのだと言う。非道無残な罪を犯した者に心の平和が与えられ、三人の童子を救ったばかりに生涯が苦しみに満たされたことを聖者が嘆くと、「神様とは貸借問答はいたしますまい」と老人は言う。》

聖ニコラの慈悲の行いは残酷に裏切られたと言えるが、一方、福音を伝え異教徒をおどましい生活から救った隠者パフニウスも将来の結果までは見通せなかった⁽⁹⁾。《世の男達を墮落させている評判の舞姫タイースの改宗をパフニウスが沙漠の庵で思い立った時、今まで庵に入れずにいた悪魔の化身金狼が一頭音も立てず彼のそばへ寄って来る。即ち信仰の行いに姿を借りて肉欲が彼の心に忍び込んだのである。長途の旅の後アレキサンドリアへ着きタイースの屋敷へ乗り込んだパフニウスはタイースの心をとらえる。肉の無常と未来の不安に悩まされていた彼女は救いの約束に激しく動かされたのである。その夜ローマ高官の屋敷でくりひろげられた饗宴は、哲学者の自殺騒ぎで終りを告げ、タイースがパフニウスに導かれて俗界を去る朝となる。沙漠の奥でタイースの、救霊のための厳しい生活が始まる。一方パフニウスはタイースへの愛欲に苦しめられ、祈りも苦行も彼をタイースの淫らな幻から解放してはくれない。神の声と悪魔の命令との区別ももはやつかなくなった頃、パフニウスはタイースの死が近いことを聞き知る。愛欲を抑止するものは全て失い沙漠を横切って駆けつけた彼はすでに天に魂を返したタイースの亡骸に躍りかかる。彼はすでに吸

血鬼の形相となっていた。》パフニユスは肉欲を憎みすぎたため肉欲に復讐されたのであり、異教徒ニシアスによればヴィーナスに復讐されたのである。

聖者は異教神退治の尖兵、奇蹟による救い手、有徳者として肉欲、地上愛との闘争家であるが、いずれも困難に出会う。等身大以上ではあり得ず、不純たらざるをえない人間そのものが聖者たち、少なくとも A. フランスの聖者たちの出会う困難の正体であろう。聖者を宗教上の英雄と考えれば、これらの物語は、作者が《ジャンヌ・ダルク伝》ではっきり示したように、反・英雄主義の物語であると言える。

2

この作者にあっては、聖人、修道士の物語と聖女、修道女の物語は同じではない。それは伝道の物語よりは入信の物語であり、肉欲の闘いよりは童貞を神に献じるための闘いの物語である。初期の詩集『黄金詩篇』（1873）の中に『ルーコノエ』の一篇があり、もう一人のタイースを見出すことができる⁽¹⁰⁾。《晩年のホラチウスは病弱な身体に意を用いて、ある冬を保養地バイアで過ごした。その地はローマ上流人士の歓楽郷でもあって、文名高いホラチウスはここでひとりの上級遊女ルーコノエと知合ったのである。この女性は教養あり豊かな暮らしをする人物で、独身であるこの詩人の良き友となったらしく思われる。もはや非常に若くはなかったこの女性は、カルデア人の占星術師を頼って彼女の未来に対する不安を解きたがっていたらしい。婦人たちが当時アジア渡来のあらゆる迷信に打ちこむのは「流行の狂気の沙汰」であった。ルーコノエもその例に洩れなかったわけである。ホラチウスはラテン人の良識からこれを非難し、明日を思いわずらうなとすすめている。神々の意志としての運命を思い悩むのは良くないというのが、このラテン詩人が女友達に与え得た忠告の限度であった。》しかし、この女性がもっと深い不安、運命の神秘に心を揺り動かされていたことはほんの少し努力すれば想像されるという。なぜなら彼女はラテン人ではなく異国人、おそらくそのギリシャ名前にも拘わらずエジプト人

かシリア人であったからである。この魂の不安を当時の女性において特に顕著な傾向としてとらえることによって A. フランスは、回心の日を待つ宗教的な紀元 1 世紀の世界を示すのである。

『タイース』のヒロイン、アレキサンドリアの女優にして高級遊女タイースはパフニウスによって入信をはたし、沙漠の清い修道生活の後天に召される。聖者と聖女は異なると言っても、タイースを改宗させた隠者パフニウスの運命とこれほど対照的に異なる運命もないであろう。しかし女性であっても異教徒の入信には妨げが待ちうけていないわけではない。使徒の語る激しい愛が異教徒の女に、これにならうことをためらわせたかも知れない。《ローマ騎士の若き妻ラエタ・アキリアは、マサリアに上陸したマグダラのマリアとその仲間たちに慈善をほどこした返礼として、この異国の女のとりなしで、今まで得られなかった子供を願いどおりやと授かることとなる。彼女の回心を求めておとずれたマグダラのマリアは、イエスへの熱狂的な愛の思い出を語って彼女の心を揺さぶる。それは聞いている彼女の過去を一瞬のうちに味気ないものに見せ、ねたましい心を抱かせるほどに愛の激しさを感じさせたのであった。しかし突如、操正しく信心深いローマの貴婦人として、彼女はこの愛の物語に含まれる過度なるものに気付いて激しく反撥する。自分が幸福で良きものと考えていた娘時代の生活、結婚生活はすべて平凡な空虚なものになってしまったが、彼女はマグダラのマリアに対して「お前はその神をあまりにも愛しすぎていた！」と叫ばざるをえないのである。その神の気に入るには、足許に髪を振り乱してひれ伏さねばなるまいが、それは騎士の妻としてふさわしい振舞いではないのである。罪深き女の暮しもせず、七つの悪魔も持たず、道にもさ迷ったことのない堅気な女の神とはなりえないとして彼女はこの伝道者を屋敷から立ち去らせるのであった。⁽¹¹⁾》『ラエタ・アキリア』(『バルタザール』1889)

彼女たちが開示され直面したのは、これまでに見たこともない奥深くも激しい愛のあり方であった。それはまた神に童貞を捧げるという反結婚の物語としても語られる。『コリントの結婚』⁽¹²⁾の母親は、病気回復の祈願に、娘の童貞を神に捧げる誓いを立てたため、娘と異教徒の恋人の身の上に悲劇が起こる。

この『アタラ』もまた当事者の死によってしか幕を閉じないのであるが、普通は、夫や許婚者の男が結婚の履行を迫るのを逃れることからドラマが生まれるのである。《アレキサンドリアの金満家の一人娘ユーフロジヌは、11才にも満たない頃、知恵くらべ競技会で出された謎の全てを解いて優勝したほどの天才少女であった。その上美しかったから大金持の伯爵に結婚を申しこまれる。父は派手好きで、天の星の代わりに宝石を散りばめた天球儀や香水の噴泉などを作らせて財産を使い果たしていたから、願ってもない縁組であったのだ。しかしユーフロジヌはイエズス・キリストに純潔を捧げる決心であったから、父も伯爵も聞く耳を持たないと悟ると、婚約式を待たず髪を切り職人に化けて家を抜け出す。追求の手が女子修道院に及ぶことを見越して、スマラグドと称して男子修道院の修道士となりおおせる。その後何年もたって、青ざめた旅人が修道院入りを志願してやって来たが、恋にやつれた伯爵だった。ついで袋を背負いぼろをまとった乞食が一片のパンを求めてやってきたが、それはかわいい娘ユーフロジヌにただ一目会うことだけが望みの父であった。かくして三人の修道士はともに美徳の生活を送り、ほとんど同じ時に天国へと召されたのである。⁽¹³⁾》『聖女ユーフロジヌ』（『螺鈿の手箱』1892）。さらに『スコラスティカ』（同上）は嫁いだ夫が妻の信仰に良き理解を示す美談と言えよう。

聖人の禁欲的生活に悪魔の誘惑がしのび寄るのとは異なり、これら聖女たちの生涯を地上的愛欲が乱すことはない。内面に矛盾や分裂はなく一途な愛である。聖女たちの愛の対象は想像の中にのみ存在し、現実の対象ではないから、あくまでも純化し、不変であり、堅固であり得るのであろう。異教徒改宗の物語は、ここでは男女の愛を越えた第二の新しい愛の発見として描かれているのであって、A. フランスの女性描写の重要な一部分をなしていると言える。

3

A. フランスは一方、素朴な信仰者の物語を求めていたらしい。それを聖母奇蹟談に見出したのが『聖母の軽業師』（『螺鈿の手箱』）である⁽¹⁴⁾。《軽業師

バルナベは商売がうまく行かず悲しんでいたところ、さる修道院長に出会う。聖母を賛美する仕事に専心できると聞いて心動かされたバルナベは芸をすてて修道院で暮すことになった。しかしバルナベは不幸であった。書物を著す修道院長、聖母を絵に描きあらわす者、石に聖母像を刻む者、賛歌を詩作する修道士などを見るにつけ、聖母をこのように立派に讃えまつことが自分にはできないと知ってバルナベは悲しみにくれた。そんなバルナベがある日から一日中礼拝堂へこもるようになる。僧院長たちが扉のすき間から盗み見ると聖母の祭壇の前でバルナベはこともあろうに軽業を演じているのだった。自分の腕前と経験を聖母のために用いているのだとは知らぬ人々がこの不敬なバルナベを引きずり出そうとした時、聖母は祭壇を降り立たれ、青い衣の裾で軽業師の額の汗を拭われた。修道院長と修道士はひれ伏すのであった。les simples は神を見るのである。》この一篇がガストン・パリシに献じられているわけは、この物語を作者はこの碩学の中世文学史の一頁に見出したからである。素朴だが型破りの奉仕と優しい報いが交換される物語。A. フランスの短篇を代表してよく採り上げられる所以である。

しかし、A. フランスの描く素朴な信仰家は、A. フランスの教養的主人公と対極にあるようなバルナベと必ずしも常に同じではない。やはり書物や談論と無縁とは言えない場合もあるように思われる。作者はこうした素朴な信仰者をフランシスコ会の修道士に見出したが、これは『ジャンヌ・ダルク伝』（1908）準備中にこの救国の聖女をとり巻く宗教環境を研究中に会ったものであるらしい。『聖女クララの泉』の「語り手」神父アドネ・ドニに作者のフランシスコ会修道士への好意はよく示されているのではないか。

『聖女クララの泉』は『赤い百合』（1894）とともに作者のイタリア旅行の旅土産と言えるものである。シエナに仕事で滞在中、作者は夕暮時の食後の散歩の折、聖女クララの泉と呼ばれる涸井戸の縁でフランシスコ会の神父アドネ・ドニと話を交わすのを楽しみとしていたのである。古文書研究家の神父は少し変わった人で、世界平和を唱えながら実は内乱の歴史を好んでいたし、サタンにも少し甘かった。ところでこの井戸はかつて町の住民のかたくなな心に傷

ついたフランチェスコが、愛弟子のクララの顔を水の面に見出して元気を取り戻したという井戸である。この井戸の縁石に腰をおろして神父が語ってくれたのがこの短編集の物語であるという。

タイースへの思いが断ち切れず、破戒の兆を心におぼえた隠者パフニウスが慰めを求めて相談に訪れるパレモン老人は、A. フランスの作品に最初に現れたフランシスコ会修道士であるとされる⁽¹⁵⁾。《老パレモンはナイル河のほとりの菜園でサラダ菜に水をやっている。老人はパフニウスに喧噪の巷から突如沙漠の中の難行苦行に移るような無理はしない方がよいとすすめるのだったが、老人は自分の肩にとまった一羽の鳩を驚かすまいと静かに歩きながらサラダ菜に水をやり続ける。「空飛ぶ鳥の中に神をたたえることのできる」老人を見てパフニウスは泣きたいような気持ちにとらわれるのだった。》この『タイース』の舞台は紀元4世紀のエジプトであるから、8世紀をひとまたぎにした作者のアナクロニズムが微笑ましい。

もしこれら素朴な修道者に悪魔が俗念を吹きこむとすれば、それは愛欲などではなく、まさに素朴さと単純さを棄て去ることであろう。

《ヴィテルボの町のフランシスコ会修道士フラ・ジオヴァンニは服従を楽しみとしていた。彼は行動することを恐れ、考えることを恐れたのである。行動は空しく、思考もまた悪だったからである。彼は貧しい人々に衣を脱いで与えるので、しばしば裸で広場の子供と遊んでいるのを発見された。彼にお堂の番をたのむと、高価な奉納物を貧しい人に施してしまうのだった。この世にあるものは悉く神のものであったからである。博士たちの方が神の愛をより多く受けているのではないかとの疑念がはらされてからは信念は益々かたまつた。しかしある日施し物を乞う寡婦に化けた悪魔が近づき、祭壇の銀のコップを施し物として受け取ると、修道士に言う。この銀器はお金になって情夫の手に渡り、その男は自分を捨てた騎士を闇打ちにして殺してくれることになっていると告げフラ・ジオヴァンニを悲しませる。次に修道士を訪れた悪魔は修道士の唇に炭火を当て、考え、話す能力を与える。ヴィテルボの町の重立った老人によって作られる「善の友」の会は市民に善を奨励するための集まりであった

が、その会合に現われた修道士は会の偽善を告発する。そのため獄につながれて裁判を受けることになる。修道士は、真理は絞首台まで一緒に来てくれると自分に言い聞かせるのだった。獄吏に化けて牢獄を訪れた悪魔は修道士へ真理への疑いを吹き込む。巨大な車輪の表に、世界の各民族、各階層、各年令のおびただしい人たちが集合。各人、様々の色の旗を手に持ち、その旗には様々な標語が書きあらわされているが、いずれも「これが真理だ」と結ばれている。悪魔がひずめのある脚でこの車輪を蹴ると車輪は激しく回転を始めやがて真白な円となる。真理は修道士が信じたようにただ白いのではない、あらゆる色が混り合った不純一なものなのだとすることがこのようにして示され、修道士は涙を流す。裁判の結果、国家の安全を乱す陰謀を企てた罪で死刑が言い渡される。殉教者になりたい気持ちを失った修道士の前へ悪魔は現れて死刑囚を救い出し、町を見おろす山の中腹へと連れて行く。悪魔によって善を行う困難を教えられ、考えるという悪を知り、真理の純白性に疑いを持たされた彼は、不動の信心を失って不幸になったのである。破滅して涙を流しながらも、この人間の不幸が今やフラ・ジオヴァンニの歓喜であり、苦悩であり、誇りとなったのである。『人間悲劇』⁽¹⁶⁾（『聖女クララの泉』）作者のドレフュス事件の体験が素朴な修道士のいたましい変身によって表現されているのであろう。

再び信徒迫害の時代に遭遇したのが『神々は渴く』（1912）⁽¹⁷⁾の修道士ロングマールである。《革命下のパリ、食糧配給を待つ行列の中ですりとまちがわれてリンチに会いそうになった老僧侶をプロットーは救う。宗教弾圧をからくも生き残った老修道士ロングマールであった。半年の後、逮捕を逃れて雨中をさ迷うロングマールをプロットーは見出し、彼の屋根裏部屋でともに住むことになる。ロングマールはもぐりの教会でミサを唱えたりして日々を過ごす、やがて亡命貴族との連絡を疑われたプロットーと共に逮捕される。獄中でロングマールは裁判での弁論の準備にかり切りとなり、あらゆる紙や板の上に、すすとコーヒーがらで作ったインキで原稿を書きためて行く。しかし裁判は大勢ひとまとめの手短なもので、弁論の意欲を失ったロングマールはすべてを神の思し召しにまかせ、裁判長が訊問の中で宗派をまちがって言ったのを直した

だけであった。》

『聖女クララの泉』の神父アドネ・ドニと修道士ロングマールには共通するところがある。「一日中この町（シエナ）の古記録図書館で、細々した調査に夢中になっていた私」と同じく、神父アドネ・ドニも一日中シエナの図書館で仕事をしてから聖女クララの泉に現れるのである。無知を信条としてはいるが、実は事によると作者以上に書物に埋もれて生活できる人である。だからこそ余得として「誰にもまして母国の古のことに通じて」おり、「素晴らしい話をいろいろ知って」いたのであろう。ところで作者が高く買っているのはこの神父の博識ではなく、「研究生活で白髪にはなっておりながら、無知な人間のようにこやかなまた屈託のない気分を持ち続けていたこのフランチェスコ派の僧侶を、私はすぐさま好きになった」のである。つまり「博識、そして素朴な物の考え方」を作者は高く買っているのである。その一方で神父は、市場でみかんを売る小母さんの店で立ち止り、けしからぬ話にも耳を傾け、美しいトスカナ言葉を仕入れる人だった。状況も宗派もちがうが、『神々は渴く』のプロットーの間借り人、修道士ロングマールといかにも相似た人である。ロングマールは修道院を追われてから数学やラテン語を教えて暮らしたし、フランスの教会に対する迫害についてパンフレットも書いた。僧侶達の立憲的宣誓が教会の規律にもとることを示すために、かなり大部の著述さえしたと言っている。だからこそ獄中でおびたしい引用を含む弁論の原稿を壁板やシャツにまで書きためようとするのである。ところでロングマールの素朴さは、遠慮がちな居候生活はもちろん、裁判当日のあっさりした弁論放棄にもよく表われている。

『神々は渴く』では、作者の愛好する人物型、「快樂主義の哲人」プロットー、博識で素朴な修道士ロングマール、いずれも命を落とす。この二人は恐らく、歴史の中の二つの理想型、古代の哲人と中世の聖者の流れを汲む登場人物であろう。A. フランスは古典古代の崇拜家、また中世の愛好者として、それぞれの文明の理想像を代弁者として選んだのではないだろうか。そして時代の理想像は単一であることを求めて不寛容であるから、理想像同士は相容れない

と考えられる。隠者パフニウスが哲学好きのニシアスを（嫉妬も勿論あるが）憎んだように、『神々は渴く』のジャコバン党员ガムランは、ニシアスの懷疑家プロットーも、宗教弾圧の生き残りの修道士ロングマールも生かしてはおけなかったのである。ガムランは近代の理想型「愛国的共和主義者」であったからである。

注

- (1) 新集世界の文学 23 「A. フランス・ブールジェ」解説（近藤矩子）p. 503. 中央公論社，昭和 45 年。
- (2) Anatole France, Oeuvres I, p. 462-466. Bibliothèque de la Pléiade Gallimard, 1987. （以下 Pl. と略）
- (3) Pl. III, 1991, pp. 619-645.
- (4) Pl. IV, 1994, pp. 13-39.
- (5) Pl. IV, pp. 1178.
- (6) Pl. I, pp. 891-895.
- (7) Pl. II, 1987, pp. 571-589.
- (8) Pl. IV, pp. 334-360.
- (9) Pl. I, pp. 721-863.
- (10) Oeuvres complètes illustrées de Anatole France, Tome I, pp. 365-371, Calmann-Lévy, 1925. （以下 O.C. と略）
- (11) Pl. I, pp. 629-637.
- (12) O.C. pp. 246-361.
- (13) Pl. I, pp. 903-913.
- (14) Pl. I, pp. 918-923.
- (15) Pl. I, pp. 828-830.
- (16) Pl. II, pp. 634-686.
- (17) Pl. IV, pp. 433-624.